

# SHOW-HOUSEシネマフルーツ

★★★★

ミッション：インポッシブル  
ファイナル・レコニング

2025年／アメリカ映画  
配給：東和ピクチャーズ／169分

2025（令和7）年5月17日鑑賞 TOHOシネマズ梅田

Data

2025-48

監督・脚本：クリストファー・マッカリー

原作：ブルース・グラー『スパイ大作戦』

出演：トム・クルーズ／ヘイリー・アトウェル／ヴィング・レイムス／サイモン・ベッグ／ヴァネッサ・カービー／イーサイ・モラレス／ポム・クレメンティエフ／henリー・ツェニー／アンジェラ・バセット

## みどころ

トム・クルーズ主演の『ミッション：インポッシブル』シリーズは前作（第7作）と本作（第8作）の“2部作構想”で完結する予定だが、そもそも「デッドデコリング（推測航法）」とは一体ナニ？

沈没したロシアの最新鋭の原子力潜水艦には最新鋭のAI（人工知能）によるデッドレコニングが備え付けられていたが、それをめぐる世界の脅威とは？  
こりや超難解！高校2年生の頃、微分・積分が苦手だから法学部に決めたのに、今更、スマホやチャットGPTの勉強のみならず、微分積分まで！第7作でもほとんどわからなかつたが、それは本作も同じ。そのため、映画評論上でも、

ファンの声からも不満が・・・。

他方、頭を空っぽにして楽しめるのが、“スタントなし、CGなし”的トム・クルーズ自身が身体を張ったアクションの数々。長々と続く海中探索（アクション）は不評だが、小型プロペラ機での空中アクションは見応え十分。また、イーサンの個人技と同窓会的な展開を見せる“チーム力”的融合もお見事だからそれにも注目！なお、本作の「ファイナル」性については、ハリソン・フォードやジャッキー・チェンの例を考えると、いささか怪しげ・・・？

■■あれから29年！遂に「ファイナル」が日本で先行公開■■

テレビシリーズの『スパイ大作戦』をベースとし、トム・クルーズが主演したアクション・スパイ映画『ミッション：インポッシブル』シリーズの第1作が公開されたのは1996年。同シリーズは過去7作作られており、本作は第8作目の最新作だ。

私は過去『ミッション：インポッシブル／ロード・ネイション』（15年）『シネマ36』未掲載)、『ミッション：インポッシブル／フォールアウト』（18年）『シネマ42』未掲載)

の2本を鑑賞しているが、いずれも評価は星3つと低かった。また、本作と「PART ONE」「PART TWO」の関係に立つ第7作の『ミッション：インポッシブル デッドレコニング PART ONE』(23年) (『シネマ53』38頁)は、星4つながらも『デッドレコニング』という、誰にもわからないタイトルは如何なもの？“2部作構想”も如何なもの？美女たちが次々と登場してくるのは楽しいが、登場人物が多すぎると、ストーリーがわからなくなってしまう危険もある。しかも『PART ONE』と『PART TWO』の“完結性”と“連続性”を両立させるのは至難の技だ。』と書いた (『シネマ53』38頁)。

そもそも「デッドレコニング」とは一体何？それがさっぱりわからない上、なぜ2部作構成にしたのかもさっぱりわからなかつたが、それは本作が公開された今も同じだから、ここではまず、前作の評論にも掲載した「デッドレコニング＝推測航法」の解説を掲げておく。

ナビゲーションシステムにおいては、常に自車の位置(地図上の地点=緯度・経度)を認知しておくことが基本となる。現在では通常、衛星測位システム(GPS)によって測定が可能であるが、トンネル内や山の陰で測位できないことが起こる。この場合、最後に即位した地点を起点とし、自車の進行方向と走行距離を蓄積(積分)して現在位置を算出、走行していくことを推測航法と呼ぶ。方位は地磁気センサーやレートジャイロ、あるいは左右輪速度差から、また距離は車輪速センサーや車速センサーから得るが、これらのセンサーはいずれも誤差が避けられず、一般に測位誤差は累積して走行距離の2~3%といわれている。これを地図上のネット情報と比較しながらソフト的に修正するマップマッチングという方法も併用されている。

## ■■暴走するAIも十字架型の鍵も超難解！こりゃしんどい！■■

本作の世界公開は2025年5/23だが、日本公開に特別の意欲を燃やすトム・クルーズは、わざわざ「日本のファン向け」のビデオメッセージを届けたばかりか、日本では5/17に1週間前の先行ロードショー公開が実現した。そこで、先日の『教皇選挙』(24年)が満席だったことの“教訓”を思い出した私は、本作についても事前にチケットを購入し、5/18(土)の座席をキープしたが、それが大正解。当日は大きなスクリーンだったが、ほぼ満席状態だったから、『ミッション：インポッシブル』シリーズの人気にあらためてビックリ！もっとも、本作は事前の新聞紙評をみても評判はマイナスである上、ファンからも「十字架型の鍵をめぐる物語が難解すぎる」「説明シーンが多すぎる」「テンポが悪い」「3時間は長すぎる」等々の声が上がっていたが、さて本作のAIやデッドレコニングを巡る難解さは？

私は、大学の学部選定に当たって高校2年生の時にすぐに法学部に決定したが、これは決して法律や政治が好きなためではなかった。それは、物理はもとより数学が苦手で、高3になれば始まる数学の微分・積分の難問にはとてもついていけないと判断したためだ。結果的に無事入学できた大阪大学法学部では、最初の3年間は法律の勉強は全くしなかった

ものの、学生運動に熱中する中で、政治の勉強、マルクス・レーニン主義の勉強、哲学の勉強等に励んだ他、何よりも討論と議論のやり方を磨いて相手を論破する技術を学び、ビデオ書きではその内容を競い合う中で、一定の時間内にそれなりの文書をまとめる技術を学ぶことができた。そしてそれが、1971年1/26の21歳の誕生日に、司法試験を目指すことを決意して、我妻栄『民法総論』の分厚い教科書を購入し、孤独な一人きりの受験勉強を始めたことに大いに役に立ったわけだ。

したがって、それから弁護士歴51年を経た今の私には、論理性や文章の書き方、そして相手に負けない弁論技術が身についてきたわけだが、そんな私が本作を鑑賞するについて、なぜ今さら微分・積分の問題に直面しなければならないの！近時はスマホの学習の他、チャットGTPの学習も必要不可欠になっているが、今さら微分・積分の勉強はご免だ！

## ■□ヒーローの個人技とチーム力の融合はお見事！？■□■

黒沢明監督の『七人の侍』(54年)や、それをハリウッドでリメイクした『荒野の七人』(60年)は、7人の侍や7人のガンマンたちの個々のキャラも興味深かったが、それ以上に7人の“チーム力”を強調していた。それに対して、『007シリーズ』はイギリスの諜報組織であるMI6のチーム力以上に、“殺しのライセンス”を持つスパイ、ジェームズ・ボンドのキャラに重点をおいていた。それは、ジェイソン・ボーンを主人公とした『ボーンシリーズ』も同じだし、トム・クルーズ扮するイーサン・ハントを主人公にした『ミッション：インポッシブル』シリーズも同じだ。

ところが、シリーズ第8作であり、第7作とセットの関係にある本作は「ファイナル」と名づけられ、シリーズ最終章を意識したためか、グレース(ヘイリー・アトウェル)の再登場など、過去のシリーズのさまざまなシーンでイーサンを手助けする役割を担ってきたさまざまなキャラクターが総動員され、一種の“同窓会”的な様相を呈するので、それに注目！本作に見るイーサンの個人技とベンジー・ダン(サイモン・ペッグ)を中心とするチーム力の融合はお見事といえどもしかにお見事だが、若干教科書的な感じも・・・？

## ■□航空機アクションは立派だが、海中探索は如何なもの？■□■

『ミッション：インポッシブル』シリーズ最大の魅力は、何と言ってもトム・クルーズが、“ Stantonなし”、“CGなし”、あくまで自らの身体を張ったド派手アクションにある。その中でも有名なものが、『大脱走』(63年)でスティーブ・マックイーンが見せた名シーンをはるかにオーバーする、超長距離のバイクアクションだ。さあ、トム・クルーズしか成し得ないそんなバイクアクションは、本作のどんなストーリーの、どんなシチュエーションで登場するの？

そんな興味もあったが、本作前半に大統領から与えられるイーサンの任務は、まず第1に、いかにして海の底に沈んでいるロシアの最新鋭の原子力潜水艦セウストポリの艦内に備え付けられているデッドレコニング(推測航法)までたどり着くのか、そして第2に、そこに十字架型の鍵をセットすることによって、“ある所定の目的”を達成することだ。

私の持論は、「潜水艦モノは面白い」だから、潜水艦同士の魚雷戦や、潜水艦 VS 駆逐艦の戦いのシーンはいつも大興奮！ところが、本作を見るイーサンの海中探索（アクション）は如何なもの？海中での撮影が限定されるのは仕方ないし、潜水服に身を包み、水中眼鏡をつけた姿でのアクションにも制約があるのも仕方ないが、本作前半で長々と続くそんな海中探索（アクション）は、はつきり言って退屈だ。

それに対して、本作後半に見る、悪党が操縦する小型プロペラ機に身体を張ってしがみつき、乗り移ったイーサンが、今にも振り落とされそうになりながら大奮闘し、ついにはプロペラ機を奪い取る長時間アクションは見応え十分だ。さすがに、現在のトム・クルーズの肉体のサマや身のこなしに世界メダル級の体操選手のような華麗さはないものの、彼の任務達成に向けた使命感と、どんなに困難な肉体的条件も乗り越えてみせるぞ、という根性だけは、29年間何ら変わっていないことがよくわかる。還暦にしてなおも全く衰えないトム・クルーズのこの体力とこの気力は立派なものだ。

## ■□■本作は本当にファイナル？シリーズの延長は？？■□■

本作は「ファイナル」とタイトルされているものの、Wikipediaを調べてみると「今後の展開」として、次のとおり書かれていた。すなわち、

2023年6月、マッカリーはファンダンゴに対し、『レッド・レコニング』と『ファイナル・レコニング』でシリーズが終わるわけではなく、今後の作品のアイデアを練っていると語った。

すると「ファイナル」はインチキ？もっとも『インディ・ジョーンズ』シリーズのハリソン・フォードは70代半ばまで頑張っていたし、さまざまなシリーズを平行して継続しているジャッキー・チェンも70歳代でなおハードなアクションで活躍中であることを考えると、60代のトム・クルーズはまだまだ若い。飛行中の小型プロペラ機にしがみついたり、荒れ狂う大海原にダイブしたりする彼流のこだわりのアクションはボチボチ無理かもしれないが、そんなアクションを封印するマイナスはストーリーの面白さを強化すればいいだけのことだ。すると、このシリーズは延長され、数年後には『ミッション：インポッシブル』第9作の登場も・・・。

2025（令和7）年5月23日記